岩手県立大学看護学部紀要 7：179—185，2005
Journal of the Faculty of Nursing, Iwate Prefectural University

2003年度イースタンワシントン大学看護研修旅行報告

安保　寛明

A report of the study tour at Eastern Washington University, 2004

Hiroaki　AMBO

Key words：看護，アメリカ，研修，ナースプラクティショナー

はじめに

平成16年2月27日から3月9日に，本学看護学部生11名と大学院生1名が米国ワシントン州を訪れる海外研修旅行が実施された．これは本学が国際交流協定を結んでいるEastern Washington Universityとの協定を活かし，語学ならびに看護学のプログラムに参加したものである．筆者はこの旅行に同行することで米国の看護実践と教育の一部を知ることとなった．本稿に報告し，今後への資料としたい．

研修地域および研修機関について

1）スポケーン市について

今回研修に赴いたスポケーン市（Spokane）は米国西海岸最北部に位置するワシントン州（Washington）の内陸部にあり，スポケーン市で約30万人，広域では50万人弱の人口を有する，シアトル（Seattle）についでワシントン州第2の都市である．研修に赴いた時期におけるスポケーン地域の気候は，気温，湿度，天候とも盛岡市とほぼ同程度であった．

研修を受け入れた教育機関は大きく2つあり，ひとつはイースタンワシントン大学（Eastern Washington University, EWU）内にある英語教育機関のEnglish Language Institute（ELI），もうひとつがワシントン州内の4大学が合同で運営を行っている看護教育機関のIntercollegiate College of Nursing（ICN）である．

2）イースタンワシントン大学と，英語研修機関であるELIについて

イースタンワシントン大学は1882年の創立で，ワシントン州内に6校ある4年制大学の1つである．元々は教師の養成学校として設立されたが，現在では学生総数は8,000人，学士課程43分野，修士課程42分野を提供している州立総合大学となっている．

English Language Instituteはイースタンワシントン大学内にある英語の教育機関であり，外国語として英語を学ぶ留学生に対する教育をおこなっている．1クラスあたりの人数が12～15人，年間100名前後の学生が入学していて，出身国別には日本から30%，韓国と台湾からそれぞれ25%，その他が南米および中東からの留学生という構成である．授業は，レベルは1～5の5段階があり，内容はReading/Writing/Grammer，Listening/Conversation，Notetaking/ Discussion，University Seminarの4種類がある．留学生たちは週に10コマ（1コマ2時間）前後の授業を選択している．

ELIの特色のひとつに，留学生向け教育プログラムのステューデントアドバイザーがおり，EWU教育学部で英語教育を専攻する学生が担当していることが挙げられよう．今回の研修旅行でも2名のステューデントアドバイザーが案

内や送迎などのサポートをおこなってくれた．アドバイザーのひとりは自分の卒業後について，上海の中学校で英語の教師として英語教育に携わる予定であると語っていた．

3）看護研修機関であるICNについて

ICNはワシントン州東部にある大学が連携して設立した看護学の専門的教育機関であり，看護師の育成をおこなっている．学生はそれぞれワシントン州立大学（Washington State University），イースタンワシントン大学（Eastern Washington University），ゴンザガ大学（Gonzaga University），ワイワース大学（Whitworth College）の4大学に所属しており，半年間ごとに40名強（すなわち年間に80～90名）の学生がこの分野を専攻する．看護に関する専門課程の講義はICNで，それ以前の基礎講義は各大学でおこなわれている．なお，ICNにはスポケーン以外にもブランチキャンパスがあり，全ての講義が高速回線によって遠隔配信されている．

ICNでは，日本の大学でいう3年生と4年生の時期に看護実習と講義が平行して行われ，それぞれを半年ごとに区切って第1から第4学期（Semester）と呼んでいる．すなわち第1学期はわが国で言う3年前期，第4学期はわが国で言う4年後期にあたる．第1学期ではナーシングホームでの実習と老年看護学の講義があり基本的身体ケア（体位変換，移動介助，清拭足浴など）や比較的安全な医療行為（点滴の交換など）を実習している．第2学期では一般病棟（内科，外科）の実習と成人看護の講義が行われ，手技としての看護技術すべての習得と一般的な疾病構造の理解を目標としている．第3学期では小児および母性分野の実習と関連する講義が行われ，継続的アセスメントによる看護計画の評価や心理社会的側面のアセスメントなどが目標となっている．第4学期では地域と精神看護に関する実習と講義が行われ，健康増進モデルの活用，個人および集団への教育的介入，デモンストレーション介入の実施などが目標とされている．

4）主要な実習機関であるSacred Heart Medical Centerについて

実習および見学の中心となったこの病院はワシントン州でも随一の医療体制にあり，地下2階地上9階の本館と地上6階の別館からなるヘリポートを有する病院であった．この病院は心臓バイパス術などの循環器系手術数が西海岸で最も多いそうで，手術室は大小あわせて10以上あった．全ての病室が1床または2床部屋で構成されており，緩和ケア病棟と小児科，産科では全ての部屋が個室で付き添い用の簡易ベッドとカーテンが用意されていた．

研修日程および内容について

表1に研修旅行の日程を示すとともに，具体的な内容を以下に示す．

表1：2003年度研修旅行の日程

	午　　前	午　　後
2月27日（金）	到着（2月27日～）ICN：施設案内，自己紹介	ICN：歓迎レセプション，ホストファミリー紹介
2月28日（土）	休日	
2月29日（日）	休日	
3月1日（月）	ELI：英語研修	ICN：日米医療制度に関する議論
3月2日（火）	ICN：学生実習に同行（主に病棟）	ICN：病院見学
3月3日（水）	ICN：学生実習に同行（主に地域）	ICN：技術演習室見学，講義出席
3月4日（木）	ICN：実習の振り返りに参加	ELI：英語研修
3月5日（金）	ELI：英語研修	市内観光
3月6日（土）	スキー旅行	
3月7日（日）	休日	お別れパーティ
3月8日（月）	帰国（～3月9日）	

施設案内（2月27日）

看護学研修の中心的運営者であるCarol Allen氏と挨拶を行ったあと，ICN内の見学を行った．全ての講義室に遠隔授業用のカメラとモニターがあること，技術演習室の出入りが自由で専属スタッフが2名いることなどが紹介された．

歓迎レセプション（2月27日）

ICN学科長からの挨拶のあと，具体的な研修日程に関する説明とホストファミリーの紹介が行われた．ホストファミリーは全員がICNの教員であり，各家庭に学生2名がお世話になった．ホストファミリーはアメリカにおける文化だけでなく医療や看護に関する話題も豊富だったようである．

英語研修（3月1日，4日，5日）

バスでイースタンワシントン大学へ移動．英語研修の責任者であるMary Brooks氏と挨拶を行い，英語研修に関するオリエンテーションを受けた．その後学生は2人ずつ6グループに分かれてアメリカ人講師の行う授業に加わった．例えばレベル5のReadingクラスに参加した学生の場合，日本人3名を含む12名の学生に混じって参加した．ここでは少年犯罪に関する話題の文章を読んでそれぞれが教科書で問われた質問に答えるものであった．本学の学生にとっては，レベル5の場合は内容が高度なために見学が主となるようでレベル3がちょうどよいとのことであった．

日米医療制度に関する議論（3月1日）

ICNに移動して日米の医療制度に関するディスカッションを行った．ICNの教員と県立大学の学生がディスカッションする形式で，ICNの教員2名から米国の医療制度に関するプレゼンテーションを受けて，日本における医療制度との違いを学生が述べる形式で進行した．

学生実習に同行（3月2日，3日）

3月2日は，本学学部生がICNの第1および第2学期生の看護実習に同行した．同行して訪れた施設は，Sacred Heart Medical Center，Deaconess Medical Center，Holy Family Hospital の3箇所である．大学院修士学生として参加した1名はICNの修士課程の授業を見学したのちワシントン州立大学併設のクリニックを見学した．学部学生が訪れた3施設はいずれも大規模総合病院である．実習に用いられる病棟および関連施設は，一般外科，がん化学療法，整形外科，小児科，小児デイケアセンターなどであった．

3月3日は，ICNの第3および第4学期生の看護実習に同行した．同行して訪れた施設は，第3学期生の実習施設としてDeaconess Woman's and Children's CenterとYMCAデイケアセンター，第4学期生の実習施設としてHouse of Charity，Union Gospel Mission，Senior Center，The Park Towerなどの名称で呼ばれる施設である．なおHouse of Charity, Union Gospel Mission, The Park Towerはいずれも低所得者またはホームレスのためのアパートメントや生活支援センターの名称である．また一部の本学学生は施設での実習ではなく，地域アセスメントを行うためにフィールドワークするICN学生に同行した．

病院見学（3月2日）

午後は，本学学生全員がSacred Heart Medical Centerの見学を行った．手術室や救急救命室を含む全ての病棟を見学した．

技術演習室見学（3月3日）

ICN学内にある技術演習室を見学した．技術演習室には専属のスタッフがいて，学生はいつでも自習できるとのことであった．技術演習室にはベッドは2つだけであったが，点滴やウロバッグの他に呼吸音や心音を聞くための機械，心電計などがありフィジカルアセスメント全般の演習もできるとのことであった．

講義出席（3月3日）

午後は全員が看護学の講義に参加した．骨折や腰痛をテーマにした予防医学に関する内容であり，具体的には高齢者の転倒や骨粗しょう症など患者に対する看護診断的視点の講義が中心であっ

たが，看護師の腰痛発生頻度などの看護師自身の障害予防のための講義も含まれていた．

実習への振り返りに参加（3月4日）

午前中は，ICN学内で学生の行うカンファレンスに同席した．カンファレンスの開催様式が多様であった．例えば地域アセスメントの実習をおこなっているグループの学生はKJ法に似た方法でグループワークを行い，その結果をホワイトボードに書き出していた．別のグループでは同時期に実習を行っているアリゾナ大学との遠隔カンファレンスを実施しており，地域アセスメントの結果を比較して議論していた．

研修で見聞した看護と教育の実際

前述の日程で行われた研修旅行によって，米国のある地域で行われている看護の実践と教育について知る機会となった．以下に述べる数点について補足説明をしたい．

1）ナースプラクティショナーの臨床活動

ICNの教員には多くのナースプラクティショナー（Advanced Registered Nurse Practitioner: ARNP）が在籍していた．CNSが主として病院における看護の上級職であるが，ARNPは主として慢性疾患などの1次予防を志向した地域における看護の上級職である．ARNPは当該診療科の処方権および診断決定権があること，診療所の開設を行うことが可能であるため，ARNPを有するICN教員のほとんどが，クリニックの開設や病院との契約などの形式で臨床活動を行っていた．

たとえばある精神科ARNPの場合，1日あたり8～20人の患者がクリニックを訪れるとのことであった．訪れる患者は深刻な例から軽い適応障害や不安まで様々であるとのことで，自傷他害のおそれがある場合には入院機能を有する病院への紹介状を，精神科以外の疾患（糖尿病や高血圧など）の併発が疑われる場合には他科のARNPか医師への紹介状を書くのだそうである．また，麻薬などの一部の薬物は処方することができないが精神科では大きな不自由はないということであった．

他にもICNには，婦人（女性）科，学校保健などのARNPが在籍しており，それぞれが独特の臨床活動を行っていた．例えば学校保健のARNPは日本で言う移動図書館のような形のバスを市から貸与されており，各学校を巡回して健診を行っているのだそうである．この場合もARNPは学童期特有の診断に応じて様々な治療を行っている様子であった．

2）病棟での患者の早期離床と実習学生の独立性

外科病棟を訪れた際に，手術後の離床訓練を行っている患者を見かけた．臨床看護師に聞くと，心臓移植術後翌日の患者で座る練習とベッドから降りる練習をしているのだという．術式や術後の合併症に問題が無ければ，手術から2日程度の間に離床が行われるとのことであった．なお一般病棟のほかに，Day Surgery Unitという日帰り手術専用の待機と回復を目的とした病棟があり，看護師のほかに臨床心理士と理学療法士が2人ずつ常勤で待機していた．

医療情報の電子化が進んでおり，実習学生を含む看護師は患者に関する情報を病室にあるノート型コンピュータで記録していた．投薬などの処置時にはノート端末についた赤外線バーコード読み取り機を使用し，与薬用の容器についたバーコードを読み取ることによって，自動的に時刻を伴った記録がなされる仕組みであった．ノートPC以外に病室で看護師が記入するものを探したところ，ベッドの正面に小さな黒板があった．何に使っているのか聞くと，その日の担当看護師が朝の挨拶時に「○○さん，今日の担当は××です」と書くそうで，患者からは好評であった．

実習学生には基本的に教員がついていないため，ほとんどの看護業務を独立して行っていた．学生に聞くと，侵襲性の高いIVHや筋肉注射の時には臨床看護師が立ち会うが，基本的には事前と事後の記録からの確認が行われるということであった．看護記録も学生が直接記入しており，看護計画も直接に電子カルテ内に併記していた．学生は基本的に一人から二人の受け持ち患者を担当するが，成人看護の実習期間は約10週間（週2.5日）と長いのでたくさんの患者をうけもつことになるのだと言っていた．

3）地域における精神保健福祉活動について

筆者は，ICN教員の案内の下でスポケーン市内のホームレスおよび精神障害者支援の現状を

知ることができた．ホームレスと精神障害者向けの生活支援センターHouse of Charityには朝からたくさんの利用者がいて，聞いたところ1日およそ200人の利用があるとのことであった．このセンターは市街地からほど近く，市内で最も集客力のある商業複合ビルから徒歩10分以内で到着する．シャワールームが5つ，冬期間限定の簡易ベッド100床，利用者が施設の設備を使って焼き上げているパンがあったが，それぞれのサービスは飽和していない様子であった．

常勤の福祉職員に聞くと，運営資金の半分以上が寄付によるものだという．ボランティアの看護師が週2日訪問していて，利用者と打ち解けながら健康に関する話題を提供し意識付けを図っていた．

ほかには，精神障害者向けのドミトリーとして2箇所を見学した．どちらも，元々ホテルだった建物を精神障害者向けの住居として転用しているとのことであった．どちらも全ての部屋が個室であり，8畳ほどの広さの部屋にベッドと机が備え付けてあるというものであった．訪れたのは午前11時ごろであったが，ロビーでくつろぐ者，出かけている者など様々であった．生活訓練が特になく施設に専門職が1～2名いるという点で日本の精神障害者福祉ホームに近いという印象を受けた．

米国研修旅行からの考察

見聞し新たに知ることとなった医療制度や教育方法にはわが国との様々な相違点があった．文化的背景などを加味すると優劣の判断をつけることは困難であることを踏まえたうえで，アメリカでの看護実践と教育について，3点ほど述べたい．

1）ARNPの有する権利に関するわが国での意義

わが国でARNPについて情報を集めると，処方と診断の決定権を有する点[1)2)]が強調されて見えるのであるが，実際にARNPの仕事ぶりを聞くと，医師による積極的な治療介入が必要かどうかを見極めるゲートキーパーとしての役割が重要であるように感じられた．

米国においてARNPが処方権などの地位を確立した1990年代の社会的背景として，医療の高度化に伴って医師がプライマリーケアまで手が回らなくなったことが一因にあると指摘されている．一方，わが国においてもプライマリーケアの重要性は高まってきている．地域による医師数の格差があること，特定機能病院では相対的にプライマリーケアが軽視される傾向にあること，糖尿病や高血圧などの慢性疾患に対する早期からの治療的介入が必要とされてきていること，小児および婦人科の医師割合が減少傾向にあることなどが背景として指摘できよう．さらに看護師の業務としても，わが国の様々な研究において養護教諭や保健師や訪問看護師の優れた業務特性として医師との連携や患者への動機付けが挙げられている．プライマリーケアの重要度が高まっている点，看護師の業務特性の2点を考えると，わが国でもARNPが必要とされる素地はあると考えられる．たとえば養護教諭や保健師がある者の主訴を聞き検査をオーダーした状態で医師へ紹介すれば，医師は検査結果をもって診察に臨むことができ，より速度と精度の高い診断の確定を行うことが可能であるし治療に入ることが可能である．この点は，看護師の権利拡大ばかりに着目されがちなナースプラクティショナー制度に対する新たな視点となるのではないかと考えている．

2）寄付やボランティアの評価を受けることの意義

米国における地域精神保健福祉活動では，多くの場で精神障害者に関係する人達が元気でそれぞれ個性的な活動をしていることを強く感じた．国民性の違いもあろうが，筆者が感じたその理由はボランティアが支援の中心にあり行政や市民団体から認められていることである．

米国では設立された施設の評価が寄付やボランティアからの評価として反映されるため，利用者に支持される施設が力をつけているように感じられた．一方わが国では，精神障害者社会復帰施設を設定するためには認可までに多くの手続きが必要である上に，施設が補助金による運営であるために，地価の安い郊外に施設が設立されるケースが圧倒的に多い．さらにわが国の場合は社会復帰施設への補助金の額が一定でありその他の収入がほとんどないために，職員を増加させたり残業手当をつけたり常勤職員の割合を増やしたりという臨床的努力が経営的努力と並立しない．すなわち，良質な援助を行っている施設が経営的に評価されていない現状にあると言えるのである．わが国でも良質な施設

が活動を伸ばせるよう，施設に対する評価の方法やその報酬を考える必要があると感じた．ただし米国でも，就労や対人関係の形成などの特定の目的を持った訓練機関はわが国に比べて活動が乏しいことも感じた．この点について現地職員は，利用が長続きしない人が多いために市民団体からの評価を受けにくいのだと言っていた．訓練機関を評価することは利用人数だけでは困難であり，異なる種類の施設をどのように評価するかは米国においても課題になっていることが伺えた．

わが国において，精神障害やホームレスの問題に取り組むボランティアの育成も必要があると感じた．筆者が見学した施設では，ボランティアとして定期的に通う学生が健康教育を題材にした劇を行ったことで施設職員や学生への健康相談の件数が増加したそうである．施設に職員以外の人間が出入りすることは様々な好影響があると予想されるため，わが国でも精神保健ボランティアや一般市民との交流の機会を多くする努力が必要であろう．そのためにも施設が市街地などの交流しやすい場にあることが重要なのだと感じた．

3）米国における看護教育の特徴

ICNで学ぶ学生の自主性と責任意識の高さは筆者の想像以上であった．実習に臨む学生はそれぞれが個別に患者へのケアを行っており，必要に応じて臨床看護師に助言をもらうほかは自立して行動していた．この理由としては国民性以外にも様々な要因が考えられる．実習において学生が電子カルテで記入するため臨床看護師と指導教官による確認がしやすいこと，技術演習室に専属のスタッフが常駐しているために学生が十分な技術演習の機会を確保していることが挙げられるが，さらにARNPが教員として存在することによる意義を挙げたい．

ICNで学ぶ学生にARNPについて聞いたところ，学生の人気は急性期病棟や手術室での勤務のようでARNPを目指している学生は多くなかった．しかしARNPを有する教員が臨床活動と教育活動を両立している点に畏敬の念を表している学生が多かった．実際に筆者はARNPである大学教員の講義に出席したのだが，ARNPによる講義は診断と治療に臨場感があり，患者の治療に看護師は主体的に関係できるとの思いを強くすることができた．病棟や地域の看護実習で出会った学生の積極性や責任感は学内での教育段階から育てられていると感じた．

おわりに

本学学生向けの研修旅行に同行し，病院および地域医療に関する多くの見聞を深めることができた．また看護の上級専門職であるナースプラクティショナーについても懇談する機会が多くあった．国民性や教育体制による学生の違いや医療体制の違いを感じることは多かったが，根底に流れる理念や観念の共通性を感じることが多い2週間でもあった．およそ1年が経過した今でも思い出すことは，教員も臨床看護師も学び成長することを美徳とし，生涯挑戦し続けるという信念をもっていたことである．

謝辞

冒頭にも述べたように，ここに紹介した研修旅行は岩手県立大学看護学部およびイースタンワシントン大学の数多くの教員の手によって実現した．研修旅行の手配をしてくださった岩手県立大学看護学部国際交流委員会の諸先生方，イースタンワシントン大学のMary Brooks先生，ステューデントアドバイザー責任者のGrant氏へ感謝するとともに，11日間のスポケーン市滞在のすべてのスケジュールに対して丹念に計画してくださったICNのCarol Allen先生の細やかなご配慮に感謝いたします．

文献

1）樋口まち子，クローズ幸子：ミシガン州におけるナースプラクティショナーの活動　日本の専門看護師教育体制の示唆として，Quality Nursing，10（8），773-781，2004.

2）大岡みち子：米国のアドバンスドプラクティスナース:ナースプラクティショナーの活躍，こころの看護学，3（2），173-177，1999.

資料

1）English Language Institute（ELI）：
http://eli.ewu.edu/home.html
2）Intercollegiate College of Nursing（ICN）：
http://nursing.wsu.edu/
3）Deaconess Medical Center:
http://www.deaconess-spokane.org/
4）Sacred Heart Medical Center:
http://www.shmc.org/